

管理者として大切にしていること —心構えと振る舞い—

一般社団法人大阪府病院薬剤師会会長
近畿大学病院薬剤部薬局長
竹上 学 Manabu TAKEGAMI



病院薬剤師となって約40年が経過し、一区切りである定年退職が近づいてきています。これまでの病院薬剤師人生を振り返って、直近10年の自分を見つめてみると、ほとんどが薬剤部門管理者として管理業務を行っていますが、当然のことながら実務に関する内容に関して判断を求められることが非常に多くあります。とは言え、自分が実務を行っていた時期から、薬剤部門で扱うシステムや機器等は改良され機能はアップしており、医療を取り巻く状況も、医療DX、人工知能（AI）、人間の代わりにしてくれるロボットの導入等で医療現場は様変わりしている途上です。病院薬剤師がかかわる業務は、そのまま対応できるものと変化を余儀なくされるものに分かれ、ともに現状に見合った変化が求められます。これまで、管理者として、従来からある基本的な重要事項はそのまま継続し（KEEP）、改善すべきものは現状に合わせた形に変更していく（CHANGE）ことを考えながら進化する、KEEP&CHANGEを心に秘めて業務に取り組んできました。自分の知識が乏しい、あるいは、未だ経験したことがない分野では部下や専門職に指導を乞い、自己解釈のなかでの不明点は質問することが重要であると考えており、そのなかでKEEP&CHANGEを見極めていくつもりです。加えて、スタッフが一丸となるために「的確な判断と指示で安心を与え信頼を得る」ことを心掛けてきました。このことは業務上だけでなく、団体役職や日常生活でも同じであると愚考します。

会長を拝命して8年が過ぎようとしていますが、自施設薬剤部門管理者以上に重責であり、責任をもって会運営と事業を行うには役員的一致団結が重要となります。会員施設の薬剤部門管理者の方々を役員に据えているのは、およそほとんどの病院薬剤師会も同じだと思いますが、それぞれの意見を拝聴し、協議して関係部門に指示を出すことは大きな責任を伴います。互いに理解しあうためには日頃からの関係が良好であるとともに相互信頼があってこそ、そのためにはコミュニケーションや心理的安全性も重要なポイントであり、同等な立場で話すことで発言の本質を汲み取ることが可能になります。コロナ禍以降はオンライン会議やメール連絡が主流となり、軽く発言できなかつたり、発言を控えたり、相手の表情が読み取りにくくなりました。また、直接話すところをメールで済ませがちとなりましたが、重要ポイントではやはり話すことが重要とつくづく感じており、人と向き合い、かつ、誠実に対応することを心掛けています。

これまでの的確な判断ができたか気になるところではありますが、役員および委員の方々のご理解とご支援が大きいと感じています。昨今、人工知能が様々な場面で活躍してきていますが、その内容を吟味し鵜呑みにすることなく的確に判断するための材料として活用していかなければなりません。

恥ずかしながら、自己の振り返りを述べましたが、これから薬剤部門管理者や団体管理者になっていく次世代の方には、刻々と変化する社会や医療情勢を把握し、いろんなことに挑戦（CHALLENGE）する姿勢をもって、興味があることには積極的に取り組み、自分の振る舞い方を確立していただきたいと思います。